

# 異文化間の文章構造及び文章展開に関する対照研究 — 日韓の新聞社説の文章を対象に —

李 貞敷

## 1. はじめに

文章レベルでの今までの対照研究は、文構造が違う言語（主に日本語と英語）を対象としていることが多かった。

ここでは文構造が非常に似ているとされる韓国語と日本語（志部：1990）の文章を対象に主張との関連から両言語における文章構造と文章展開のパターンの異同を探ることを目的とする。ここでいう文章構造とは、「文章を、全体として眺め渡したときに見られる結構」（永野：1986）のことで、書き手の一番言いたい文（主題文）の出現位置から把握する。また、文章展開とは、「主張へと導くための文章作成過程、もしくは書き手の主張を納得させるための文章作成過程」のことで、文の機能の面から把握する。

## 2. 先行研究

### 2.1 文章構造

文章構造を論ずる際の分析観点としては、主に「接続論」、「連鎖論」、「統括論」（市川：1978、永野：1986 など）を挙げることができる。文章全体の構造を把握する究極の方法としては、接続論と連鎖論の観点を加えた統括論からみる方法が適切であるとされる。また、統括力を示す言語形式としては、「a 接続表現」「b 指示表現」「c 反復表現」「d 省略表現」「e 提題表現」「f 叙述表現」（佐久間：1999）などがあるが、実際の文章を対象として、文章構造を述べている研究の多くは、「f 叙述表現」を対象としている。

### 2.2 文章展開

文章展開は文の機能を明らかにし、その文の機能の相互関係、または全体の文の機能の流れから把握できる。文の機能を分類している研究としては、市川(1978)、木戸（1992）、土部（1990）などがあ

る。市川は文の内容の質的相違によって、1)「事実を述べた文」、2)「見解を述べた文」、3)「事実と見解を交えた文」とに分けた上で、文の配置される様相を述べられている。木戸では、文の機能を主張、評価、理由、根拠、解説、報告に分類し、これら六種の文の機能の中で、「主張」の文章中の位置により文章構造のあり方を判定している。また土部は、「『論説文』や『評論文』の基本的な表現機能は、定立した見解の正当性を『論証』するところにあるが、その論証過程で、事実についての『記述』や『説明』が前提になる、という場合が少なくない」という。つまり、書き手は自分の意見を述べるために、まず話題を記述し、その話題について、いろいろな角度から説明をすることが基本前提になるということである。これらの研究では文の機能を分類してはいるが、文の機能の相互関連性についての言及は見られない。

## 3. 分析方法

### 3.1 分析資料

2003年6月1日～2003年6月30日（1ヶ月分）の『毎日新聞』（58文章）・『朝鮮日報』（78文章）の日韓の全国紙の社説の文章を対象としている。

### 3.2 分析方法

#### 3.2.1 文章構造

##### (1) 主題文の認定方法

今までの文章研究の多くは、例えば叙述表現の統括面からといった一元的な観点からの分析が多かった。しかし、1つの観点からの分析では説明に不十分さが残る。そこで本研究では文章構造をより精緻に把握するために、有力な分析観点と考えられるいくつかの観点、つまり、複合的な観点から日韓の新聞社説の文章構造の特徴を明らかにすることを目指す。

## (2) 文章構造類型

佐久間(1993)では、文章構造類型を「頭括式・尾括式・両括式・中括式・分括式・潜括式」の6種類に分類している。

本研究では文章構造類型の分類において、佐久間を参考としているが、少しの修正を加えて次の7種類に分類することにする。

「前」「中」「後」「前・中」「前・後」「中・後」「前・中・後」である。佐久間の分類との違いは、佐久間で「両括式」としているのを本研究では「前・中」「前・後」「中・後」に分けている点と、社説は主張を主な目的とする文章であるため、佐久間で「潜括式」としている類型は表れない傾向が強い。本研究では佐久間という「潜括式」は除外して考えている点である。

## (3) 主題文の認定基準

- ① 叙述表現及び主観修飾語の観点から、文を「事実」と「意見」に分けた。
- ② 提題表現の観点から、提題表現を「大の提題表現」と「小の提題表現」に分けた。
- ③ 見出しの本文中の反復表現の観点から、見出しの機能を「話題提示」と「主張表明」に分けた。

## (4) 主題文になり得る条件

1) 見出しの機能が「主張表明」の場合

- ① 見出しがそのまま反復されるもの、または、見出しの叙述表現が形を変えて、「意見」を表すもの。
- ② 最も意味の完結度の高いもので、一般に文脈への依存度が低く、他の文からの独立性が高いもの。

2) 見出しの機能が「話題提示」の場合

- ① 見出しに提示された話題について述べられているもの、つまり、見出しと関連のある提題表現が反復されているもの。
- ② 叙述表現が「意見」を表すもの。(特に第三者に対する要望や当為の機能を持つものが主題文になりやすい)
- ③ 最も意味の完結度が高く、一般に文脈への依存度が低く、他の文からの独立性が高いもの。

ここで、1)、2)ともに、それぞれの全条件が満たされている文が最も主題文になりやすいと考えられる。

### 3.2.2 文章展開

## (1) 研究対象

ここでは日韓で違いが顕著に見られる文章の前半の一部(第1文と第2文)に絞って調査する。第1文には主に話題が提示され、第2文には第1文の話題についての説明を行うことが多いと考えられる。

## (2) 文の機能の分類

本研究では、市川(1978)と土部(1990)を参考に、文の機能を大きく、話題提示と説明に分け、それぞれの文の機能が「客観的」に述べられているか、「主観的」に述べられているかを調査する。また、説明においては、その説明の内容によって「補助説明」「内容説明」「根拠説明」に分けて分析することにする。ここでは、第1文の話題提示の仕方によって第2文の説明の方法の違いが出るのが予測される。

## 4. 分析結果と考察

### 4.1 文章構造

〈表1〉から分かるように、①日本語は「後」、韓国語は「前・中・後」の文章構造である傾向が強い。②日本語は、文章の終わりの部分に主張を述べる「後」と「中・後」の文章を合わせると58文章中37文章で全体の63.78%を占める。③韓国語は、「後」が78文章中の4文章(5.12%)、「中・後」の文章も1文章(1.28%)しか見られない。しかし、「前・後」の文章が12文章(15.38%)で2番目に多い。④韓国語の文章構造は文章の前半の部分に主張を述べる「前・後」と「前・中・後」の文章を合わせると78文章中の73文章(93.58%)で全体の殆どを占める。

以上から日本語と韓国語は文レベルでは非常に共通点の多い言語であるが、文章レベルでの文章構造には相違点が目立ち、Kaplan(1966)によって“オリエンタル”と一括りにされた韓国語と日本語とではその文章構造に違いが見られ、一括りに出来ないということが示唆された。また、文構造が違っていると文章構造も当然異なると考えがちだが、文構造が似ている場合でも文章構造は異なる場合があるということが本研究で明らかになった。

〈表1〉日韓の本文の文章構造エラー!

文章構造類型	前	中	後	前中	前後	中後	前中後	合計
日韓の新聞								
毎日新聞	0 (0)	2 (3.44)	25 (43.10)	0 (0)	3 (5.17)	12 (20.68)	16 (27.58)	58 (99.97)
朝鮮日報	0 (0)	0 (0)	4 (5.12)	0 (0)	12 (15.38)	1 (1.28)	61 (78.20)	78 (99.98)

## 4.2 文章展開

### (1) 話題提示の方法

〈表2〉第1文における話題提示の方法

話題提示の方法	客観的	主観的	その他	合計
日韓の新聞				
毎日新聞	48 (82.75)	6 (10.34)	4 (6.89)	58 (99.98)
朝鮮日報	0 (0)	78 (100)	0 (0)	78 (100)

〈表2〉から、日本語は「客観的」に、一方、韓国語は「主観的」に「話題提示」をすることが分かる。つまり、話題を提示する方法として、日本語は書き手の意見を表すことなく、あるがままの事実をそのまま述べるが、韓国語はあるがままの事実を示すとともにそれについて書き手の意見を述べる傾向がある。

### (2) 説明の方法

次に第1文を受けての第2文の説明の方法について日韓の傾向を探ることにする。

〈表3〉第2文における説明の方法

日韓の新聞	説明の方法	補助	内容	根拠	その他	合計	
毎日新聞	客観的	23 (39.65)	15 (25.86)	0 (0)	1 (1.72)	39 (67.24)	58 (99.99)
	主観的	6 (10.34)	1 (1.72)	1 (1.72)	11 (18.96)	19 (32.75)	
朝鮮日報	客観的	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	78 (99.98)
	主観的	30 (38.46)	21 (26.92)	9 (11.53)	18 (23.07)	78 (99.98)	

〈表3〉から、①日本語は客観的に、一方、韓国語は主観的に説明を行うことが多いことが分かる。つまり、第2文の説明の方法において、日本語は第1文の話題提示と同様、書き手の意見を表すことなく、客観的に説明する傾向が強いが、韓国語は書き手の意見や主張を交えて説明する傾向が強いと言えよう。②説明の内容においても、日本語は根拠の説明が見られず、補助的な説明と第1文で言及した話題に関する内容説明が殆どである。韓国語は日本語と同様、補助的な説明と内容の説明が多かったが、叙述方法として、書き手の意見を表す主観的な表現による説明が多かった。この点は日本語と対照的である。

また、韓国語は第1文で話題とともに書き手の意見（評価や主張）を述べているため、それに対する根拠説明が比較的多く見られた点でも日本語とは対照的であると言えよう。

以上から、日本語は後部に主張が表れ、その主張へと導くために前部で客観的に話題を提示したり、説明をしたりする傾向が強いことが分かった。

一方、韓国語は前部・中間部・後部に主張が表れ、特に第1文で話題を述べるとともに主張を述べているため、その主張を納得させるために第2文で主観的に説明を行っている傾向が強いことが分かった。文章構造と文章展開は文章を巨視的にみた場合と、

微視的に見た場合との違いで、両方の面から異文化間の文章の特徴を分析することで、より明確な形でその特徴が明らかになると考えられる。

#### 5. 今後の課題

本研究では文章展開の特徴を探る方法として、特徴の顕著な日韓の新聞社説の第1文と第2文に絞って分析をしたが、言うまでもなく、日韓の文章展開の特徴を把握するには、文章全体の展開パターンを調べる必要がある。今後の課題としたい。

#### 参考文献

市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版

- 木戸光子（1992）「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」『表現研究』55 表現学会、9-19
- 佐久間まゆみ（1993）「日本語の文章構造Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」宮地裕・清水康行編『日本語の表現と理解』放送大学教育振興会
- 佐久間まゆみ（1999）「現代日本語の文章構造類型」『日本女子大学紀要 文学部』48、1-28
- 志部昭平（1990）「朝鮮語と日本語—その構造の類似性と差異性について—」『国文学』55-1
- 永野賢（1986）『文章論総説』朝倉書店
- 土部弘（1990）「論説・評論の表現」『表現学大系 各論篇』27、7-58
- Kaplan, Robert B（1966）Cultural thought patterns in intercultural education. Language Learning, 16, 1-20.

い じょんみん／お茶の水女子大学大学院 応用日本語論講座  
hkyljm@yahoo.co.jp